

奈良時代の疫病対策

新型コロナウイルス感染症が世界中で流行し、感染防止対策として私たちの日常生活にも大きな変化が求められました。そこで平城宮跡資料館では、2020年6月16日より7月19日まで「古代のいのりー疫病退散！」と題して、奈良時代の疫病対策に関するミニ展示を開催いたしました。

奈良時代、天然痘が全国で猛威をふるい、特に天平9年(737)の大流行では政権の中樞を担う藤原四兄弟もその命を奪われました。展示会場では、呪符木簡や人形などの祭祀具や土器といった出土遺物をとおして、当時の人々がどのように疫病に立ち向かったのかを紹介いたしました。

二条大路の路面に掘られた長大なゴミ捨て穴からは、ほぼ完全な形をとどめる食器が多量に出土しました。出土した土器が完全な形をしていたのは、天然痘の感染を防止するために、まだ使える食器を捨てた可能性が高いと考えられます。また、平城京では、天然痘が流行する以前は比較的大型の食器が用いられていましたが、奈良時代後半になると小型の食器が使用されるようになります。この変化の理由について今まで特に言及されてきませんでした。まさに今と同じで、大皿での料理の盛り付けを避け、個々に取り分ける新しい生活様式が定着していった結果なのかもしれません。

展覧会には、多くの方に足を運んでいただきました。来館者からは「昔の人の疫病に対する考えがよくわかった」「当時の人々が身近に感じられた」等のお声をいただきました。今後も皆さまのご期待に添えるような展示をおこなっていききたいと思います。

(企画調整部 藤田 友香里)



展示会場風景

『仁和寺史料 古文書編二』の刊行

歴史研究室では、全国各地の寺院が所蔵する古文書について調査研究を進めています。中でも、京都市右京区御室にある仁和寺所蔵の古文書については、1958年より調査を進めてきました。調査開始から55年を経た2013年、長年にわたる調査研究の成果として史料集『仁和寺史料 古文書編一』を刊行しました。その後、2020年3月に続刊である『仁和寺史料 古文書編二』を刊行することができました。

古文書の多くはくずし字で書かれています。これらを解読するところから史料集を作る作業は始まるのですが、これがなかなか大変です。解読した後は文中の内容について検討をすすめ、いつ・誰が・何を言っているのかあきらかにしていきます。また、こうした根気と時間のいる作業にくわえ、文書の寸法や紙質など古文書の重要な情報についても集約して掲載します。以上のような一連の作業を経て、史料集はできあがっていきます。

本書では、主に室町時代から江戸時代の古文書を収録しています。朝廷や武家など時々の権力者との関わりを示す文書が数多く含まれ、織田信長や明智光秀といった有名人も文中に登場します。仁和寺は別称を御室と言いますが、これは元々天皇の居所があったことに由来しています。その後も皇族が代々の住職をつとめるなど寺院としての格が高く、皇室をはじめとする権力と密接な関係にありました。本書の刊行により、こうした仁和寺と中央権力とのさらなる関係が解明されていくことが期待されます。

なお、本書は吉川弘文館より発売されております。ご興味のある方は、お手に取っていただければ幸いです。(定価 税込¥12,000) (文化遺産部 橋 悠太)



『仁和寺史料 古文書編二』